

## こふんじだいきょうき ぜんぼうこうえんふん はにわ 古墳時代後期の前方後円墳と埴輪の祭り

ヤイ古墳・奈良市法蓮町

**調査の概要** 調査は、佐保小学校の北側、通称一条道の北側で行いました。平城京の一条南大路の北側にあたり、ここを平城京外と考える説と一条南大路より北にも南北二坪分の条坊が存在したと考える説があります。このため、調査は奈良時代の遺構の確認を目的として行いましたが、古墳時代後期の前方後円墳を発見することになり、小字名からヤイ古墳と仮称することとなりました。調査地の北側には、丘陵上に那羅山古墳群がありますが、調査地付近はこれまでの発掘調査からむしろ古墳時代の集落と考えられていたところでした。

ヤイ古墳は、復原全長約18.5mの前方後円墳で、周濠があります。周濠を含めた全長は約24mになります。墳丘は後世に削られており、埋葬施設は不明です。後円部は復原径約15mで、周濠底からの高さは0.5～0.9mくらい残っています。くびれ部の幅は約6.2mです。前方部は短く、長さ約3.5mで、前端部はやや開いて復原幅は約8.6mです。前端部の周濠は浅く、約0.2m残っています。周濠の幅は、前方部東側で約2.2mですが、後円部側では約5.5mとなり、やや広がります。これは、隣接する古墳の周濠と重なっているためかも知れません。前方部西側では約8.0mで、東側と比べて非常に広がっています。前方部の両側では周濠の形が異なっている可能性もあります。前方部前端の周濠の幅は狭く、約1.2mです。

周濠内から、古墳時代後期の埴輪、須恵器、土師器が出土しました。埴輪は、周濠の上位から多く出土し、特に前方部東側から多く出土しました。墳丘の上にあったものが、削られた際、周濠内に捨てられたものと考えられます。土器は、須恵器杯と提瓶が前方部前端から出土しました。また、くびれ部西側では底から赤色顔料を入れた土師器甕が出土しました。おそらく埴輪に塗った顔料をそのまま甕に入れて置いたものでしょう。

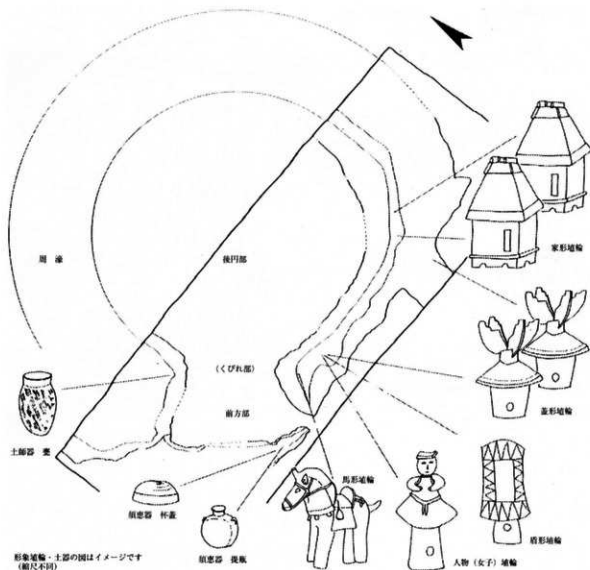
ヤイ古墳は、今から約1450年くらい前の6世紀中頃（古墳時代後期）に造られました。それは、出土した土器や埴輪の形や作り方からわかります。奈良市内では6世紀以降の前方後円墳はこれまで発見されておらず、奈良市域の最後の前方後円墳として位置付けられます。

また、前方後円墳としては、非常に小さいことも特徴です。奈良県内の前方後円墳（前方後方墳を含む）の総数は約260基、近畿圏（奈良・大阪・兵庫・京都・滋賀・和歌山の6府県）内では約830基ありますが、ヤイ古墳は、奈良県内では最も小さく、近畿圏内でも11番目に小さい前方後円墳です。ヤイ古墳の大きさは、6世紀最大の前方後円墳、橿原市見瀬丸山古墳（墳丘長約310m）と比べると、その1/17に過ぎないのです。



発掘調査地点

**埴輪の祭り** ヤイ古墳の埴輪は、すべて周濠から出土しました。大半は円筒埴輪ですが、人や物を象った形象埴輪もあります。形象埴輪のうち、家形埴輪や蓋形埴輪は後円部側から出土していることから、円筒埴輪とともに埴輪の周囲に立てられた埴輪列のなかに置かれていたものと思われる。また、馬形埴輪や人物埴輪（女子・男子）、盾形埴輪、蓋形埴輪は、くびれ部付近で出土しており、前方部に並べられていたものと思われる。古墳時代後期になると、後円部で行われていた埴輪の祭りは、前方部で行われるようになります。あるいは、埋葬施設が横穴式石室の場合は、石室の羨道やその前で行われるようになります。ヤイ古墳は、大量の埴輪が周濠から出土したにもかかわらず、石室の石材と思われるものは出土していないことから、横穴式石室ではなく、木棺をそのまま埋葬した可能性が高いでしょう。須恵器や土師器も前方部のまわりで見つかったことから、ヤイ古墳の埴輪の祭りは前方部で行われたとみて良いでしょう。須恵器の飲食器や、手を前に出し、食物の入った容器を持っていたと思われる女子の埴輪が出土していることから、飲食物を供える祭りが行われていたのかもしれない。



ヤイ古墳の形状と形象埴輪・土器の出土位置